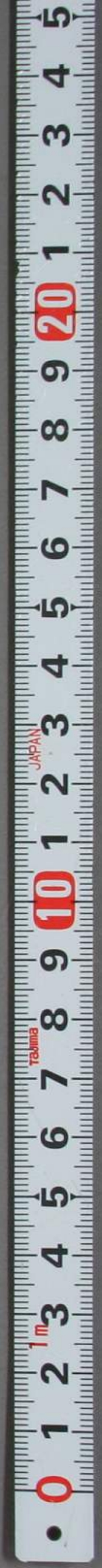




朝本
 醉
 菩提
 春

小
 二
 五
 十五

13
 3047
 7



特
3047
7

袖釋牽者即主人

公地水合成隨

火風一曲勾欄

曲終後本於大

本明粹書是卷之六

四

地忽為空

一棚頭上現金

身或化王侯或

庶民忘却目前

真木極癡人喚

化本來人

右詩偈二則狂雲集中之作

山東京山書



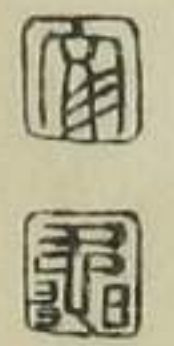
夫單傳直示の妙道の意味深長小きて凡慮のおろふ所ありて
 碩德廣才の祖師もく積雪の腰と埋利刀の臂と断のさの種々
 此若行と色て方纒其道と得るを況予が如き凡俗无智乃輩焉
 有無の兩字以離て畫松の音を聞て心得べえや唯狂雲活仏の
 禪機に託し善惡應報生死流轉の理と示し兒女勸懲の一端
 とを而已

江戸 醒醒齋京傳識



此禪史の始六冊と前帳として前冊賣出しおたすの此後帳
 四冊と合せ見れば一冊乃趣意とくものらむこと極まりなく前冊賣出
 おたす前帳と合せ全十冊とて一冊とあるべし

書舖 文龜堂主人謹白



達磨真性頌



撫方氏墨譜之圖

達磨西來不立文字。
 直指人心見性成佛。
 獨有真性一頌。雖二
 十字。回環讀之。成四
 十首。計八百字。每首
 用韻。四至俱通。以表
 真性。無有窮盡也。



本朝醉菩提後帙總目錄

- 災禍從地涌出品第十一
- 百蟹陀羅尼品第十二
- 瓜茄隨喜功德品第十三
- 生死流轉藥草喻品第十四
- 赤繩囑累品第十五
- 觸髅化城喻品第十六

以上目錄終

稻妻表紙後編本朝醉菩提後帙上冊

東武 醒醒齋山東京傳譯

那那尊 災禍從地涌出品第十一

かくて其年も過てゆる年にありぬ。爰又白炭兵衛忠知の前
 攝州の縣司とあり。京鴨河より揚州平野郷に移住するが。毎年五月
 二十八日に住吉神田の神事ありて。塚乳守の遊女五人。薄衣の衣裳と
 著て花笠とびぎ。神前に出て糸式とつとむ。とを住吉御田の植女
 とし。此日忠知神夏供奉の役目にしりて。塚に立越神事とありと
 かくる道北の庄皇子が上とあり。所と過る時急雨ふるまれば急を
 ぬれまとのとる歌の意とあり。森の小ぶに馬とよせ。従者どり
 爰にしりしるに。巳に日へこれて雨はあまうにありまう。供びとと

長柄の傘と忠知にさしおくれど。横ちぶまのつとまことふせくみわふれ。
 忠知も。此雨急びやむべし。人家ある方にゆれて明松と取来れと
 命ト多るは。一人の從者か。こゝろをせんとせし。折しも。恠哉傍の
 辻堂。安し。地蔵声と發し。明松の火のそと。我があふ。
 べしといひて。立出て。両眼より炎と放ち。忽一丈のまうの大地蔵とあり。
 忠知と目掛けて飛つらん。勢いあり。供入をいれ。見て皆氣と
 失ひて倒れ。忠知はこれと。こゝろをせんと。汝は何等の妖怪ぞ。速に
 正体とゆ。と。と。地蔵の。打笑我頃日毎夜此往來よ
 出て人と取と。汝あつどや。今宵のつま。食をやら。ど。飢ふ。おのび
 ば。汝と食にあてんと。あつどや。今宵のつま。大口の。眼と。ゆ。し。
 大勢といひて。近づき。忠知の馬上に長刀を。あつどや。の。て

とつと。斬に地蔵の。一声さけびて。地は倒れ。何ゆわらん。黒まりの飛
 去と見えし。やがて雨のやとに。供人を。人ぞ。ち。て
 起上り。忠知彼寺。明松と取来れ。と。地蔵を
 見るに。木仏と。首。長刀の斬疵あり。長刀と。鮮血を
 する。忠知も。察す。妖怪の物。此地蔵に。又。災せし
 め。妖怪の本体と打と。彼地蔵と。如く堂中
 に。家路を。皇子が上の首。斬地蔵といふ。則とれ。
 長刀の斬疵。今に。夫の叔。又大和國。木判官。貞國。前
 編。記。先。子息。桂之助。家と。其。薙。平郡
 の別。隠居。十年。前。夫。桂之助。銀杏前
 夫婦。打。親子夫婦三人。全。是。先の年

鳥部野は會合せし。蜘蛛の方以下の惡靈をその野為あること疑は。又月若九の佐々木多門之助照満と名告父桂之助後小家を續妻といふ。今八年已は三十餘歳なり。妻女の名と折琴姫といひ。年いよいよ十九歳其容貌養艷唐士の揚氏虞氏王氏の類にあらず。一乾坤并又わづらふべしとてお祭えど。臉は三月の花に嬌眉は初春の嫩柳と松ひ肌は瑤臺の月と。髪は楚曲の雲と。筆誠是といひまれば。養人あり。此比伊勢國丹雘子川大領國貫といふ人あり。子と佐々木の家と亡し。其領地をうぐんとあつらふてわりたれとて執權名古屋山三郎多門之助と補佐し。うぐ家とあま。武備嚴重あれば。容易又手と出し。唯時節と待て居り。國貫の二子金藤大國景といふ者春日まうどの折。かの折琴姫を見。哀慕乃聞は

迷ひて朝夕の飲食とさへ咽と通さむ。明ても暮ても目の前は姫の姿まがろりの如くに見え。執念深くあひこころが。つづくあひこころかれは多門之助といふ主ある身あれば。とて人づてとり。我切なる心といひあつるを。うけひこころは必定あり。昔高階師直塩冶り妻を眷意せし。想の若さこころをわりつら。かくて意死のころ。さきことあり。父大領。養て佐々木の家と亡き。さきくころを幸あれ折をうぐ。ひの姫と奪取父をまらて多門之助を打亡し。姫と我妻とを。と。元来慮の浅き者あれば。ま手に取り。ごころにあら。折のつかと待居り。比し。二月の半まれ。今年は暖気小し。吉野山の櫻倒。うろこを咲。今と盛。あは。ま。え。くれ。を。折。琴。姫。多。門。之。助。は。向。ひ。妾。當。家。小。嫁。し。と。名。四。年。あ。ま。り。當。國。又。住。ま。り。つ。ま。り。



坂北の庄皇子
 上の地蔵を斬
 首斬地蔵といふ
 是なり



定家郷の真跡よのうんとつめて。西行法師の苔清水乃あさりませ
 其いれと物語。つらびれんべ打琴姫とらつまをさづけ侍女
 女童小つらまで。山路の草臥と忘れて轉身入らぬめりて七曲乃
 坂と過千本櫻乃木の間幕打ま。毛氈繪席と敷つぬて姫と錦の
 裯よとじり。標子提盒備提多とらるるて酒宴と催し。浅く酌強と
 すめ。侍女等の琴三絃盲目法師の一節截女童の小舞碁盤人形
 の海道下りを小奥ととえて。姫と慰めまわつとれ。幕の外野風炉
 とあで。僕樽と枕の奴ととまて。現心もろ。酒機嫌の腕押力乞乃
 不動と祈とくくの清水とむとびて。酔と醒し。涎とゆれつ。髪此
 と流しぬ。ひる入奥の折しも。深編笠の下に懷紙乃覆面し。袴のらりて
 高引の角鐔の長さ刀と。関木にささく。し。紙緒の蘭金剛と穿さる

武士一人扇をひらきて胸にのて。此幕の裏とらつと見え。つらて従者
 と見え。侍三人。高股立ちの幕と引破りて。飛入標子提盒琴
 三絃のさひと踏碎んべ。根籍よ曲者よと立騒とく。姫と圍て
 守護しける。かの深編笠の武士背後より。飛入て。侍女と踏倒し。
 姫と小服にひきえうとて。つらきんにをゆれぬ。此時前司太郎へ。姫乃
 布施物とわら使して。吉水院ふ去々が。さるに。此体と入て。大玉鷲
 岩の陰道踏まして。韋駄天走りて。彼曲者の腕ととく。
 且姫をさうつ。て背後にひき。汝何寺の奴とる。大膽のふまひ
 とあをどと。晋呀。侍女ども跡とらう。追来ん。前司太郎姫と。後し
 ろんく。守護して。沙飯鉢と急べ。とらふ。侍女ととらえり。そ
 ろ物も。間よ。あね。姫の手と取て。さつ。せ。つ。まら。びり

侍女等小杖らきて此所まで逃来りけるに金藤太が魂魄のまうり
 ける宗玄忽睡を醒し姫と見るより跳寄て抱とめいとくうりける
 声音してめかうりや折琴姫我の身と恋しより非業の及よ
 うけらきて今此去に人あり生前の望のりかぞとととともよ
 冥途へ連ゆれて修羅乃妄執をくくく来まや来まよとよどつ
 支とむ侍女等とつきのけて姫の襟衣の袂とくと立くる面色の
 毛もよごるをりりりかる折しと前司太郎の姫と気づりて
 此とろも走さうり此体を見るよりこの物を狂人うり
 狼籍のさび唯一打と詈まき腕とへてのくまも又もとりつく
 横腹を一めてめてを宗玄いんとさけびて倒まき前司太郎の
 ぐり姫を背中に負すやせ侍女等とひ死つとと麓乃方へをせ

ゆれぬ宗玄のあざくわりて起上りける足腰痛て追ゆくこと
 ありがう残りおねげの跡と見おる惘然として現心もかほりやわりて
 地上と見えを一つの香包おちあるはと取上てひきまきと柴船と
 おまつけと一木のり此香包へ彼姫ととりおとせしにうらむはこれぞ
 せめての生かすと懐かおさむる折しと日のを西小入相の鐘兼然
 とひきまき花の霏々散かる我身にかる罪料をあらでを狂人瘦
 法師のうめく足は踏迷ふ念の山路となごりゆれぬ
 ○以時金藤太が魂魄宗玄が胸間小分入此後かの柴船の名
 香とあまし折琴姫とあがり合姫をまやまを支朱雀の
 宗玄火乃いそれ等へ續編よくく記せし他日突行の
 時を俟く見あつて



災禍從地涌出品第十一

後談

かくて折琴姫の恙なく館に飯り前司太郎がもつてきた多門之助小
くくきこそえられ多門之助太郎と呼其功勞と賞さくありし
寝養せりぬ。さて稚川大領國貫ハ吉野山の支とさ。兒子
金藤太が死とかなし。家の耻辱なれば此夏沙汰せり。此と家士
等口をぬい。いそふ其屍をりて葬をさぬ。みの三人乃從者
どの主人打ましとて其場より逐電し。ゆくまはさるるも
去程に國貫ハ金藤太と打きて无念骨髄とあり其原ハ折琴姫乃
夏より起と安找り祐々木と亡さんとさふ企わるとさ。時節を
まらて打過され此うく片時も猶豫すくも不日よ兵馬と起多門之
助と打七し折琴姫と生虜と生あぐ金藤太が塚かき籠前司太郎が

首を取てこれと手向兒子ハ修羅乃忘執をさくさくして。拳と握り
齒が張みして憤家士良等をめり。わらて評議とさ。伊勢大和乃
塚なる園見山よ取籠て軍乃とさ。夜打おせんと議し。よりり。
爰小又名古屋山三郎原春ハ前小父乃仇ある不破伴左衛門重勝と
打取て後佐々木の執權職とあり。高祿とたまりて何不足とさ。せ
妾ハ重垣男子と産さく。今ハ本妻とさ。其男子と小山三と
名つて今年十七歳小至り。しもさ。了角あり又鹿番ハ身猿次郎と
前小父ゆり。鹿番ハ仕へを辞して古郷に飯り。兒子同助とさ。若者
と殺しおさされを山三郎同助と家僕とさ。不便とさ。さめ
つぬぬ。その山三郎流浪の時雨漏を避るも。住家ハ深又大盥
とほりかきさる支あり。今も居間の天井に其盥をほりもさぬ。或人

山三郎 伴九郎門 重勝 鹿次郎 大盥 前編 稻妻表 後

和州吉野山中院谷の圖



折
琴
姫

金太郎魂新
藤がの玄



北
倉
宗
の
女

才
車
野
善
提
卷
之
六

九

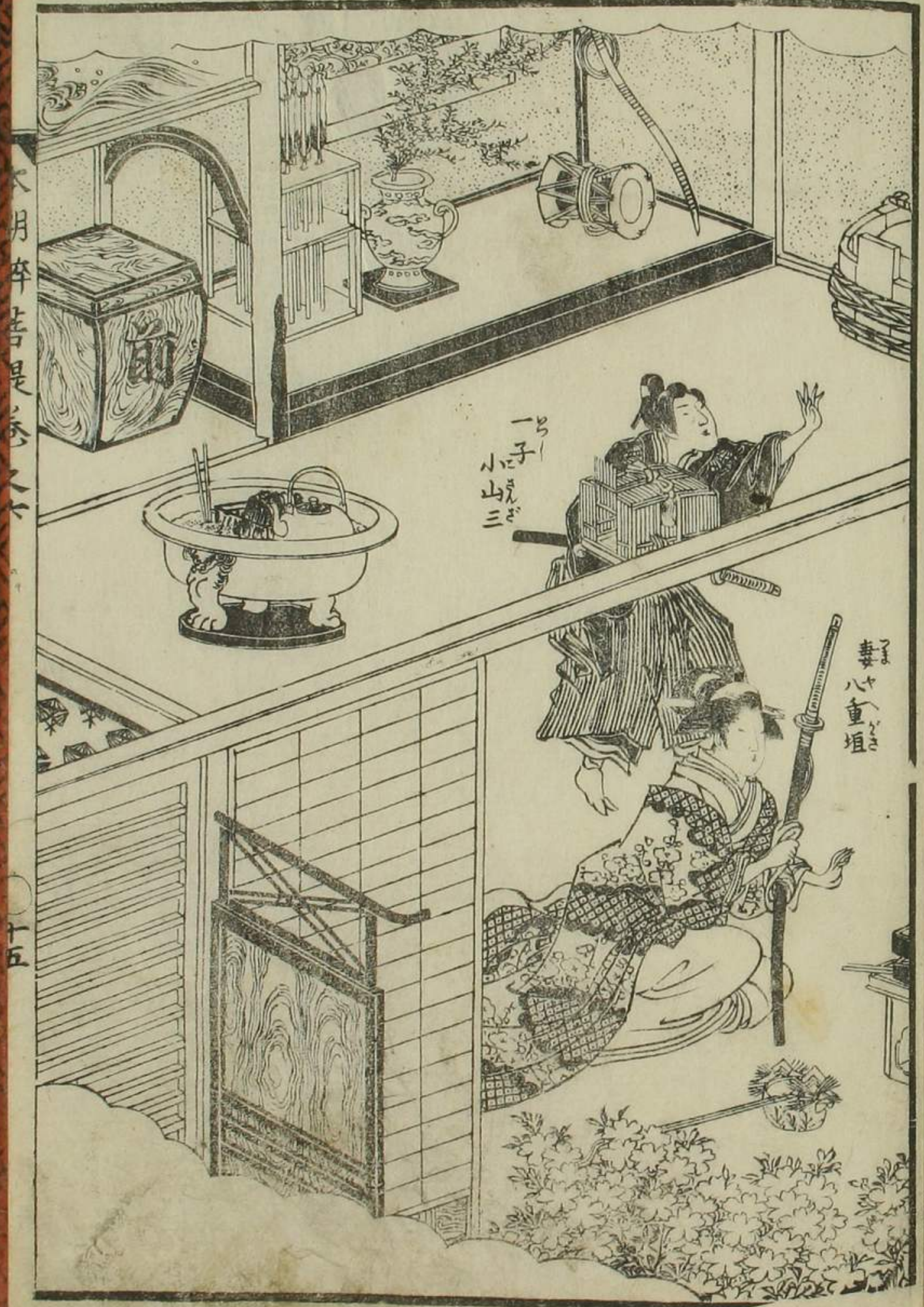
老馬にて今ハ不用のりのまれども父の遺留物とらひて養ふまぬ。
 さういふれある馬まれば菩提所ハかろや。祿んごふ葬つるまべしと
 八重垣もとく心のまふぬ顔。さういふ顔と見合せるが山三郎供揃ハ
 したやとつひ突然玄關のまはるまは供人ハ鎗挾箱持草履列と正して
 鼓へつをたぬ。○それいきておれ國貫ハかみて夜打ときらあされば國見山よそ
 軍の交度とそとのへけるに巳小日も暮るるにぞ良等のうち小志のびの
 術を得る者あるとえうといふ。佐々木の鼓に志のびり。放火の號と
 せよと令どらんべとれとうけたまうて走りやれ飛鳥乃如く築壘と越
 て志のび入鼓の動靜とうらむひらる。此時ハ乃是三月三日ハ夜ありなれ。

祝儀の酒宴中。小てさくめさ立て入舟の体あれを折うとかりひて。
 床の下にかくれ入て。時刻のうつると待居り。國貫ハ右上げとそはまの
 馬とそめて山とそり。半途ハ打出て號と待小程ま。放火を
 のげうられ。國貫これと佐と見て。さう者ごもをめぐると呼ぶ。つ。
 あまの兵と引連貝鐘大鼓と一夜小あして。佐々木乃鼓小あし。せ。
 鯉波を咄とつら。前門を打破て乱入。くれば館中乃男女あはく
 ぶられた。こはそといつるまどやとさけが声修羅道小異あう。とまう。と
 ひとまも此鼓ののまのの勇士ありなれば箇々得物と取てむい合令と
 まハ小戦多。國貫ハ兵と二手小分一手ハ多門之助。寐所と取ま。せ。
 一手ハ鼓中の諸士と戦せ別小又心き。さ兵等以下知して折琴姫と
 生虜べ。前司太郎とえうと打小をべ。と令どらう。さまを一手の

兵寺の多門之助の寐所の小みりりて。颯波と咄とわげたるを多門之助寐卷の俣小起上り。手鎗と取てさうり出りし小をむちがすと。かみふ四五人つこ伏するがふ不大勢。乱入し。矢ぶをなとつうて取巻るべからく。に生捕とドと名あつきたん。りの寐所一走り入りて。腹十文字小のさ切て北枕のぞ伏する。次の一間小侍宿せ。武士等も手痛戦々。主君生害ありとす。れまじでありとらひは。或はさしちぐ。或へ腹切を死しり多。此時名古屋山三郎の宿所小あり。此騒動とす。大木驚き火急なれば素肌。俣小鎗ひり提て。館小ひつけ。群敵と四角八面小伏く。ゆまら。松子とす。敵ハ大領國貫ありとらひ。主君ハも生害ありと。し。ハ。ま。し。う。残念や。齒と切牙と咬りして。或へ怒或へ悲。國貫と打取て。主君の仇と報んと。う。か。し。こと。尋。た。ら。ど。う。く。に。わ。る。や。あ。ま。さ。さ。ま。さ。ん。

此うへ折琴姫と主護。一旦ちりやれて良計とあまざり。と奥の殿よひて。姫とさぶひる。小侍女等泣ま。居て。今敵兵姫と生虜て。後門より。えせ。う。り。と。ん。を。益。驚。と。跡。追。ひ。て。取。り。と。後。門。の。方。へ。行。く。よ。見。子。小。山。と。見。取。海。士。と。息。も。つ。ま。あ。を。来。り。小。ゆ。た。あ。ひ。た。所。と。汝。小。あ。ひ。ぬ。汝。い。も。く。宝。蓋。に。籠。り。百。蟹。の。巻。物。と。取。り。し。八。重。垣。諸。も。逃。の。べ。し。我。の。敵。兵。と。追。う。け。姫。と。取。り。て。あ。ら。ゆ。べ。し。さ。く。と。り。の。捨。て。走りゆ。其餘の諸士等もあ。く。勇。と。さ。ら。て。う。か。し。と。小。戦。の。多。が。不。意。と。襲。と。て。皆。素。肌。の。戦。あ。れ。心。の。矢。猛。ま。と。る。と。ら。へ。な。も。と。ら。じ。く。防。が。う。美。小。の。も。中。者。の。主。君。と。失。ひ。て。何。う。せん。と。か。り。ふ。さ。ま。小。戦。と。打。死。も。も。あり。思。慮。の。あ。り。の。あ。ら。く。一。命。と。さ。り。ら。て。他。日。仇。と。報。伊。家。と。再。兵。と。さ。べ。し。と。あ。い。一。方。と。斬。技。て。あ。ら。ゆ。も。あり。の。い。が。あ。ら。た。

六月 卒 告 是 卷 六

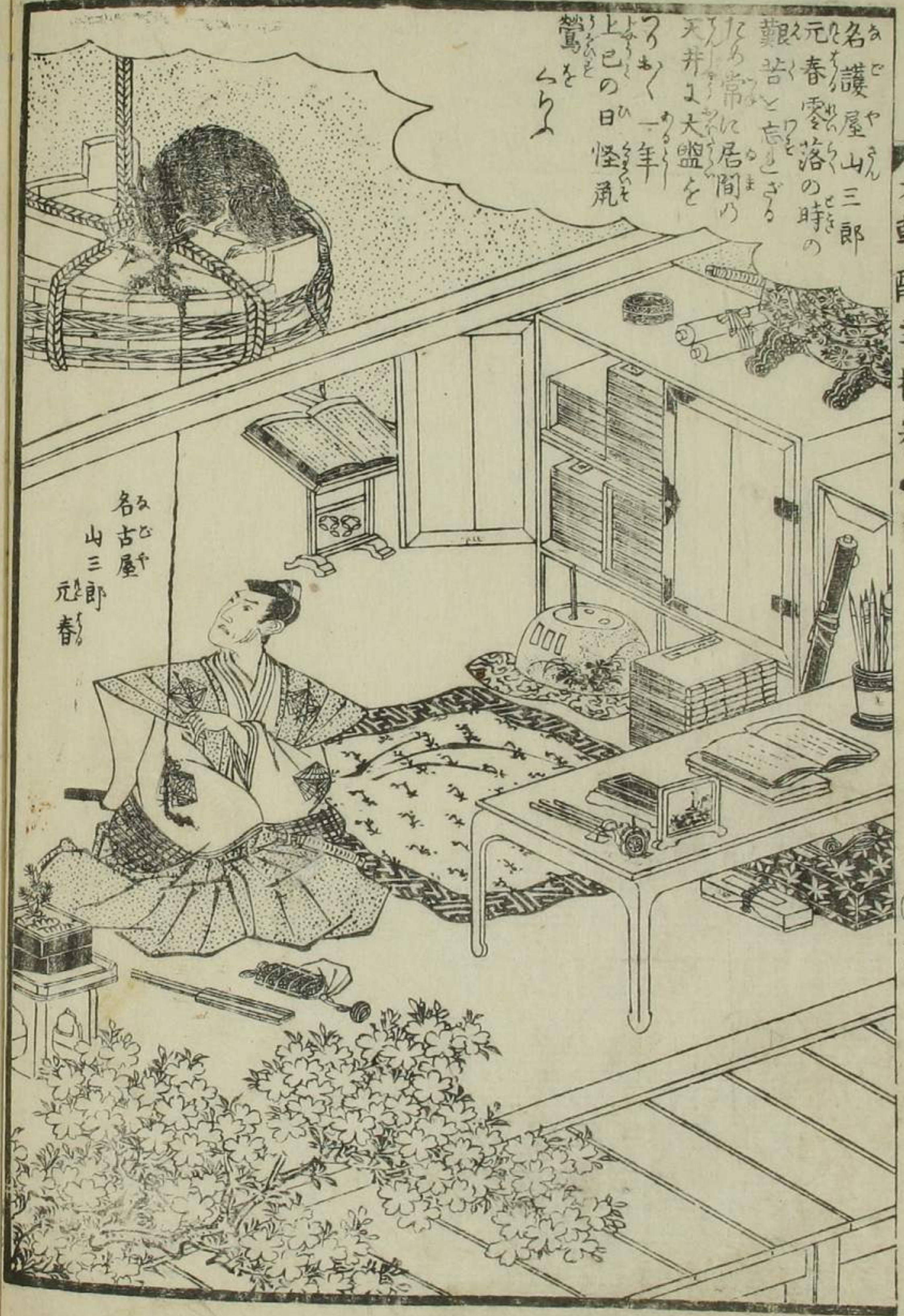


一子
小山三

妻
八重垣

大月卒吉是卷之六

十五



名護屋山三郎
元春零落の時の
艱苦と志を
たふ常に居間の
天井大盥を
するく一年
よりの日怪風
驚を
らる

名古屋
山三郎
元春

本朝御世掛巻之六

十六

春の花の猛雨小打破。四方に嵐と出て去ぬ山三郎も数ヶ所
深手と負て才上朱小深り。後又撲的倒し。数百の敵兵凱歌と咄と
わが色百連の雷の一度か落る如く。又えられた刀と杖。立上り透進
足と踏ちめて。館の方と佐と見るに黒烟うらの。猛火天と焦し。げま
さし。遠き光景あり。さうもや敵と敵小奪り。諸士も皆うら死と
かかえたり。我もかく深手と負ぬまを。そても生る。敵は生捕れそ
生耻とさう。さん。腹。中。主君のおん跡とさう。死出途乃。供
を。心と決し。差添と扱て腹小。折し。雷光曝々と
ひ。春雷。大雨。降。目。一
一村の黒雲の裏小。蜘蛛手方とさう。不破道犬。不破伴。頼
頼豪院。毎野蟹藏。薬屑三平。土子泥助。犬上雁八。多。亡。空。芳

鬚とわ。い。出。あ。ら。や。と。の。同音。呵々と打笑。き。け。を
か。小。失。て。雷。雨。も。や。ぐ。や。と。ふ。ち。あ。り。又。く。伏。木。の。家。と。わ。ら。し。忠。臣
山三郎と自滅。さ。ん。都。是。蜘蛛手方以下の悪。其。前。は。鳥。部。野。の。會。合
あ。て。相。議。し。る。詞。の。さ。う。さ。う。野。あり。彼。鷲。と。食。い。大。荒。も。頼。豪
院。が。所。為。ある。ま。う。さ。う。は。し。か。る。所。へ。小。山。三。郎。八。重。垣。の。も。は。此。野。小
来。り。山三郎が切腹の体と見る。兩人左右より。つ。今。抱。し。く
歎。悲。し。い。づ。も。わ。ら。し。山三郎の。若。き。息。と。つ。き。兒。子。百。蟹。の。巻。物。の
い。う。か。せ。い。ど。と。う。づ。め。を。小。山。三。郎。あ。い。せ。の。さ。う。宝。藏。し。う。取。出。し。
ら。に。を。り。を。懐。中。より。出。して。見。せ。る。た。山三郎。これ。と。見。て。ま。ご
其。ま。の。安。堵。あり。唯。我。最。期。の。心。ざ。う。さ。う。の。姫。の。お。ん。り。へ。ま。ご。折。り。
僕。同。助。折。琴。姫。と。脊。負。て。決。死。に。か。け。つ。け。山三郎。が。体。と。見。て。驚。歎。へ

姫も悲しむるやうなり。山二郎の姫の恙をたて見せて大に喜ぶ。汝いふ
 志を救するやせやとさぐぬき。同助の志。拙者清主人の志。見まが
 ぬしく。さかしく。成さぬめがしに。敵兵等姫と奪て走去と見つけ
 ぬゆ。今伏限よとさきて。取久し。ゆと久び。山二郎の志。汝が忠義
 披群多。やよ小山の姫の伊懐胎を尤孕とつけさぬ。是は法男子又
 いかみ。我のかく深手を負。とこと生まがらう。ことわがらぬを。
 生害小おろがらう。汝の跡は残り。八重垣同助の志。と。姫を
 づくはそかくし。まるせ。安産とせ。まして。清誕生の清児とあり。立
 時節と待て。國貫と打七し。再おん家とおこさる。ゆのこことこと
 これの志あり。又も敵兵の寄ぎらうらふ。さく。おらよとついで。腹十文字
 又かき切て。うら伏。よふ。い。皆一同。泣さけ。折。又敵兵

のま。明松とやうてし。おらき。ひて。馳来り。姫と。小山の母子と。あ
 らんと。聞。くれ。おら。と。語の。い。ぬ。あ。同助の
 姫と背負て。大勢と相手。と。戦。おら。て。ゆ。小山。由。長。刀。で。斬。散。
 母と。と。けて。おら。て。ゆ。て。双方。東西。わ。れ。お。其。ゆ。さ。さ。ぬ。
 とも。う。り。愛。お。又。前。司。太。郎。の。敵。と。戦。て。あ。ま。打。取。其。も。数。个。所。
 手。と。負。多。が。主。君。へ。已。小。生。害。の。折。琴。姫。へ。生。死。た。れ。ど。山。二。郎。の。打。死。
 と。ば。今。へ。何。と。せん。と。あ。ひ。て。腹。と。切。ん。と。せ。何。思。轉。ん。自。殺。と。こ。ど。
 ま。り。て。ゆ。へ。も。た。れ。ど。落。行。ぬ。去。程。小。國。貫。へ。多。門。之。助。小。腹。さ。せ。
 佐。木。の。家。と。亡。し。て。喜。ぶ。と。い。ふ。折。琴。姫。前。司。太。郎。小。山。の。母。子。乃
 ゆ。へ。た。れ。ざ。ん。て。四。方。手。分。し。其。跡。と。追。し。ぬ。これ。より。后。佐。木。の。領。地
 と。奪。取。て。我。物。ら。勢。和。兩。國。威。と。さ。い。ら。る。此。時。へ。是。亦。仁。大。乱。の

靈公寺雁大泥土三藻蟹柱冠野の蚊
魂の八上助子平の蔵野 豪方子



谷古屋
山三
打郷
死

靈堂不衛伴不
魂大破の門左破



維川大領国貫の
良等山三郎と
とろり

才草野善持卷之六

七

後のちして。そく世せ間かん无む為な小ち屬ぞくせむ。小ちと責せ六ろくと拒こ渠きょと亡なくおのどくん
と成なりるの互たがひに鄰境りんきやうとありその國貫こくくわんが如ごとく法令りふめいと乱らんし。非道ひどうと行なふ
者ものおわらうるが。誰たれ一人ひとりこれと糾明きうめいして罪つみをりりするうしとぞ

○さて其時そのとき小山こやま三母子さんぼしの乱軍らんぐんの裏うらめて同助どうすけとえ失なひお娘むすめのあん
れと氣きづい。其跡そのあととよづみをやとあひくれども背後うしろとさうくれが

敵兵てきへいあまも明松あきまつとみり照てしてさうくされを。あまふなる事ことも
ありがく。心こころあつむも母子ぼし兩人ふたり一旦ひとたび河内かんなへ立たのんと。金剛山こんがうざん乃すなはち

山越やまごぬはにかりぬ。同助どうすけの娘むすめと背負せおひて伊賀いげ乃すなはち方かたへあちゆれり

本朝醉菩提後帙上冊終



十六冊
下口へ

